

教育学界に屹立する、市川昭午による教育研究の真髓

〈学術著作集ライブラリー〉

教育政策研究の泰斗が、その業績の骨子を自らまとめた著作集。待望の刊行！

市川昭午

発行 学術出版会

発売 日本図書センター

Shogo Ichikawa



著作集

【全7巻】

若い世代が知性人の学としての市川教育学を学び直すことを祈ってやまない。竹内洋(京都大学名誉教授)

…自分としては六十年の研究人生を通じその時々々の教育界における支配的な言説に対して批判的な態度をとってきた点で一貫しているつもりである。

刊行に当たって（抜粋）

市川昭午

…これまで著作集というものは、自分が死んでから誰かその価値を認めた方が刊行して下さるものだと思っていた。そのため生前に自分の手で編集しようなどとは思ってもいなかった。…私の還暦に際しては同僚・友人諸氏のご厚意によって『市川昭午先生還暦記念 日本教育』全六巻を刊行して戴いたが、私が研究者の道を歩き始めた一九五三年五月から間もなく満六十年となる。その意味で研究者として還暦を迎えるこの時点で旧著の一部なりとも著作集として再刊できたのは感慨無量である。

この六十年間、私に対する世間の評価は人によって様々である。概ね左翼が優勢な時代には右翼呼ばわりされ、右翼が優勢な時代には左翼視されるなど、時代によっても一定していない。しかし自分としては六十年の研究人生を通じその時々々の教育界における支配的な言説に対して批判的な態度をとってきた点で一貫しているつもりである。それは「教育に絶対はない」という教育観と自己批判を含めて「批判的に考えるのが研究者だ」という職業観に基づく。

そうした毀譽褒貶はさておき、未だ研究者として未熟だったが、それだけに意気盛んだった頃に情熱を傾けて書いた著書や古希を過ぎてから老骨に鞭打って綴った著書が再び陽の目をみるに至ったことは、私にとってこの上ない喜びであり、叙位・叙勲とは無縁の身としてはこの著作集の刊行を以ってその代わりとしたい。…この著作集が次代を担う方々の研究に少しでも役立ち、我が国における教育政策研究の発展に多少とも寄与することができれば幸いである…。

それは「教育に絶対はない」という教育観と自己批判を含めて「批判的に考えるのが研究者だ」という職業観に基づく。

知性人の教育学

竹内洋（京都大学名誉教授）

いまから半世紀ほど前、わたしが学生のころの東大教育学部教授を代表とする名の知れた教育学者のほとんどは進歩的という形容詞がつく学者たちだった。当時のわたしには、かれらの学問、行動には違和感がぬぐいきれなかった。美でも聖でも善でもなくとも真なるものはある、自分の価値に抵触しても真ならばこれを認めるといふ知的廉直さ（マックス・ウェーバー）と真逆で、価値判断と事実判断がズルズルべつたりの学問を衣にした情念にしかみえなかったからである。

このようにわたしが主流派教育学に違和感をもったころ、市川先生は主流派教育学の流に抗する気鋭の学者として屹立していた。教育問題を政治経済から文藝評論にいたるまでまことにひろい視野から見渡し、余人がおよばない深い分析をなし、説得的な知見にいたる市川教育学が花開いていた。わたしが、教育学という学問に絶望しなかったのは、市川先生をはじめとする少数のすぐれた教育学者たちのおかげである。

市川先生が教育学界の世渡りを考えたなら、主流派の情念教育学の流れにのっていたほうがよかつただろう。それを許さなかったのは、先生が真の知性の人（インテレクチャル）であったからであるとおもう。知性の人とは単なる物知りの人ではなく、吟味し、批判し、想像することによって全体的な意味を探求する人（ホフスタッター）の謂である。先生は、本著作集刊行の言葉で自らを「左翼が優勢な時代には右翼呼ばわりされ、右翼が優勢な時代には左翼視される」と言っているが、こうした口さがない世間の評判こそ先生が真の学者であることを逆証明するものである。

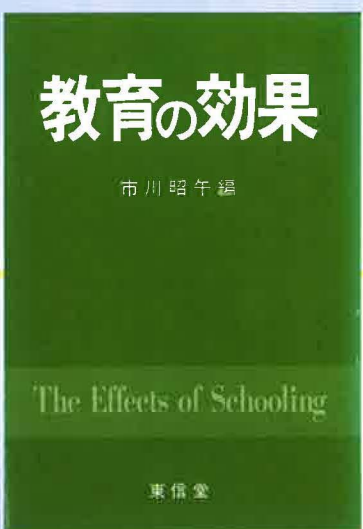
かつての主流派教育学は知性の学というより情念の学だった。ところが、イデオロギーの時代が終わると、教育学は、知性とも情念とも遠くなり、技術的官僚的学問に傾いている。若い世代が知性人の学としての市川教育学を学び直すことを祈ってやまない。

【著者紹介】

市川昭午（いちかわしやうご）

1930年、長野県生まれ。1953年、東京大学教養学部卒業。北海道大学助教授、筑波大学教授、国立教育研究所次長、国立学校財務センター研究部長等を歴任。国立教育政策研究所名誉所員、国立大学財務・経営センター名誉教授。現在「日本の教育を考える10人委員会」委員、国民教育文化総合研究所「研究会議」議員。本著作集収録以外の著書に「教育システムの日本の特質」「教育改革の理論と構造」「臨教審以後の教育政策」「教育基本法を考える」（教育開発研究所）、「教育サービスと行財政」（ぎょうせい）、「高等教育の変貌と財政」（玉川大学出版部）、「教育政策研究五十年」（日本図書センター）、「愛国心」（学術出版会）など。

編著に「リーディングス日本の教育と社会 第4巻 教育基本法」（日本図書センター）、監修・編集に「資料で読む 戦後日本と愛国心」（日本図書センター）などがある。



● 特色

1、待望久しい自選著作集

教育政策・教育財政・教育行政研究の泰斗であり、教育の未来への提言でも知られる、市川昭午。60年にわたる業績のなから、その教育研究における理論面の骨子といえる著作を自選した復刻版著作集。

2、入手困難な著作・論文を収録

収録にあたっては、現在入手が難しい著作・論文を優先した。特に『学校管理運営の組織論』（1966年）、「専門職としての教師」（1969年）については、著者の校閲を経た新版を収録した。

3、本著作集のための自選論文集

第7巻は、本著作集のため新たに、「教育の財政と経済」の領域における論文12本を編著書から精選し集成。巻頭「はしがき」として著者による解説を付した。

4、記録・資料としての高い価値

マクロな政策に関わってきた著者の研究の軌跡は、戦後の教育界や教育政策についての貴重な記録でもある。そのため著作集冒頭に「刊行に当たって」、最終巻には、「解説（主要著作について）」「主要著作目録」「略年譜」など、研究の背景を語る文章を要所に収録。

● 内容見本

四 教育行政の国際常識

1 西欧常識のつまみ食い

ここ数年來、いわゆる教育課程の自主編成路線を推進する人々は、口を開くことにわが国の教育行政は、「近代公教育原理からみて、現代教育の理念からしても、世界各国の教育における国際常識に照らしても、異例、異常なものである。」(家永教科書第二次訴訟控訴状、被控訴人第二準備書面) 旨を強調している。このように日本の教育行政が国際常識から大きく外れているというところは、教育政策を批判する際の重要な論点とされているだけでなく、教育関係法規の解釈においてもこれが有力な根拠とされている。これらの人々は是非理解を得意とするが、そこで教育原理といわれるものも多くは、近代公教育の原理や現代教育の理念であり、諸外国では既に実用化した常識だということが理由とされているからである。そこで、果たして日本の教育行政がいわれるほど異例、異常なものかどうかを吟味する課題が生じてくるが、それに先立って、いとうところの国際常識についてあらかじめ、二点ばかり注意しておく必要がある。その第一は彼等がいう国際常識なるものは、決して世界のすべての国々、あるいは殆んどどの国々に共通するものではないということである。それは世界の大部分とか、少なくとも半数以上の国々で行われているものでもない。諸外国として例証されるのは通常イギリス、フランス、西ドイツ、アメリカであることからも明らかのように、それは欧米のごく一部の国々に限られている。「国際常識」というからには世界百数十カ国の最大公約数的なところが基準とすべきだが、そうではない。

『の理論と構造』は統制論を中心とした概説書であるが、概説書として行政に関する概観的知識を提供するような内容ではなく、教育行政が当面する重要課題を採り上げ、教育行政の現実における構造を分析したものである。それに加えて当時支配的だった教育行政に関する理論や学説を批判的に検討した点の特徴となっている。本書は通常の概説書のように教育行政の機構・組織、教育の制度や機関などについての概要を説明するという体裁をとっていないが、その種の知識が不要だということについては「教育行政と学校事務」では「教育行政の基本原則」「教育行政の組織と運営」について概説している。

▲「教育行政の理論と構造」：第2巻294頁の本文(右)(約40%縮小)と第7巻「主要著作について」における解説(上)

● 『市川昭午著作集』 内容紹介

刊行に当たって

学校管理運営の組織論—現代教育の組織論的研究(新版)

序章 学校管理運営研究の課題と方法／第一部 組織再編成の諸説とその批判／官庁的組織化の政策と理論／経営近代化の科学と現実／学校民主化の理論と実践／第二部 教育労働と学校組織／学校教職員員の労働力構成／学校教育の革新と労働形態の変貌／教職員賃金の構造と体系／結章 学校管理運営の組織論

専門職としての教師(新版)

教職の専門性をめぐる論争点／教師の専門性と自律性／教職の専門性と教員団体／教師の権利闘争と専門性の確立／学校経営管理者の専門性／学校管理組織と教職の専門性

教育行政の理論と構造

(教育開発研究所／1976年第2版〔1975年初校〕)
教育行政と教育行政研究／教育行政の目標原理／教育の自由と行政の役割／教育行政の統制と参加／教職員の権限と責任／戦後改革原理の再検討／教育行政財政改革の展望／補論 宗像教育行政学批判

生涯教育の理論と構造

(教育開発研究所／1981年)
生涯教育化政策の課題／生涯教育論の登場と展開／生涯教育化の現状と課題／学歴社会から学習社会へ／生涯教育化の行財政／外国の生涯教育

生涯 仕事／学習社会の実現を目指して—21世紀への教育改革の基本方向

(市川昭午・連合総合生活開発研究所編「生涯かがやき続けるために」第一書林／1996年)

未来形の教育—21世紀の教育を考える

(教育開発研究所／2000年)
未来と教育／二一世紀の国家と世界／経済と労働／家庭・地域とメディア／宗教と価値観／学校教育の基本動向／教育改革のゆくえ／教育改革への基本的視点

教育の私事化と公教育の解体—義務教育と私学教育

(教育開発研究所／2006年)
公教育と私教育／公教育の変質と解体／義務教育制度の動揺／義務教育の費用負担／私学教育の公共性／私学政策の迷走

第6巻

未来形の大学(玉川大学出版部／2001年)

大学とは何か—機能の多様化と理念の喪失／一般教育—知識階級の消滅と教養教育の衰亡／学部教育—専門教育から一般教育へ／大学院教育—徒弟修業から職業訓練へ／管理運営—学者共和国から大学企業体へ／地域社会—「孤独と自由」から「モードII」へ

論文集集成 教育の財政と経済(本著作集のための自選論文集)

はしがき

第一部 教育財政

教育経費(北海道大学教育経済研究会編「経済と教育」／東洋館出版社／1964年)
教育と財政(嘉治元郎編著「教育と経済」教育学叢書第5巻／第一法規／1972年再版)
教育費の財政関係(加藤俊彦・武田隆夫教授還暦記念・遠藤湘吉教授追悼論文集編集委員会編「現代資本主義と財政・金融」東京大学出版会／1976年)
教育改革と教育財政(「教育費と教育財政」日本教育行政学会年報・15／教育開発研究所／1989年)

第二部 教育経済

教育問題の経済学、学校経営の経済学、教育費の公共負担、生涯教育の財政保障(市川昭午・菊池城司・矢野真和「教育の経済学」教育学大全集第4巻／第一法規／1982年)
わが国教育の経済学的分析(日本経済調査協議会「新しい産業社会における人間形成」／1972年)

現代の教育福祉—教育福祉の経済学(持田栄一・市川昭午編著「教育福祉の理論と実際」教育開発研究所／1975年)

第三部 教育の社会的効果

教育行政評価論—能率化と効果測定(伊藤和衛編著「教育行政過程論」教育学研究全集第5巻／第一法規／1976年)
教育の社会的効果(市川昭午編「教育の効果」東信堂／1987年)
解説(主要著作について)・略年譜・主要著作目録(市川昭午)

*第1巻収録文献は「学校管理運営の組織論」(明治図書／1966年)、「専門職としての教師」(明治図書／1980年第7版〔1969年初版〕)を著者の校閲を経て新たに組み直したものです。
*収録内容は変更になることがあります。

第5巻

第4巻

第3巻

第2巻

第1巻

第7巻

市川昭午著作集【全7巻】

ISBN978-4-284-10385-5

■定価 98,700 円(本体：94,000 円+税)

■解説 市川昭午(国立教育政策研究所名誉所員、国立大学財務・経営センター名誉教授)

■体裁 A5判、上製、総約3000頁

2013年2月刊行

■収録内容

- | | |
|--|--|
| 第1巻 学校管理運営の組織論(新版)
専門職としての教師(新版) ※ | 第4巻 未来形の教育(教育開発研究所/2000年) |
| 第2巻 教育行政の理論と構造(教育開発研究所/1976年) | 第5巻 教育の私事化と公教育の解体(同上/2006年) |
| 第3巻 生涯教育の理論と構造(同上/1981年)
生涯 仕事/学習社会の実現を目指して(市川昭午・連合総研
編『生涯かがやき続けるために』第一書林/1996年) | 第6巻 未来形の大学(玉川大学出版部/2001年) |
| | 第7巻 論文集成 教育の財政と経済
解説(主要著作について)・略年譜・主要著作目録(市川昭午) |

※[学校管理運営の組織論](明治図書/1966年)および[専門職としての教師](同/1980年7版[1969年初版])を、著者による校閲を経て組み直したものです。

【おすすめ先】

公共図書館/大学図書館/教育学、教育政策・教育財政・教育行政の研究者/教育センター資料室など

市川昭午による好評既刊

愛国心はどうあるべきかを、多角的な視点で究明する！

半世紀を超える著者の研究の軌跡を綴る大著！

愛国心〈全1巻〉

教育政策研究五十年〈全1巻〉

国家・国民・教育をめぐって

体験的研究入門

■定価：3,990 円(本体 3,800 円+税) ISBN978-4-284-10333-6

■定価：3,990 円(本体 3,800 円+税) ISBN 978-4-284-30336-1

■体裁：A5判・上製・384頁

■体裁：A5判・上製・520頁

■発行：学術出版会/発売：日本図書センター

■発行・発売：日本図書センター

■内容

■内容

社会不安が増大し、右傾化を憂える声と公共精神の欠如を嘆く声が交錯しながら日増しに大きくなる今日、愛国心はどうあるべきか。戦後の我が国における愛国心論の変遷と語義・概念の検討、ナショナリズム論、国家論・国際関係論、道徳教育論の考究などを通じた広い視点から、愛国心をめぐる諸問題を多角的に究明する。



長年にわたり教育研究に携わってきた著者による、研究者を志す人々に向けた実践的研究回顧録。これまでの研究成果・論争などを纏めた第一部と若き日に学んだ学校、勤めた職場とそこで出会った人々との交流などを綴った第二部で構成。研究者として戦後という時代にどう向き合ってきたかを「体験的」に語る。



〈発行〉
学術出版会

〈発売〉
日本図書センター

取扱書店

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-8-2
TEL 03-3947-9153 FAX 03-3947-9157
http://www.gaku-jutsu.co.jp
E-mail: info@gaku-jutsu.co.jp

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-8-2
TEL 03-3947-9387 FAX 03-3947-1774
http://www.nihontosho.co.jp